
Jack-o'-Lanternはタヌキに「Trick or Treat」とのまもうた

千葉 久々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Jack-o'-Lanternはタヌキに「Trick or Treat」とのまもった

【Nコード】

N60860

【作者名】

千葉 久々

【あらすじ】

司書長がハロウィンを契機に、部隊長に告白しようとするお話。ちなみに、これは駄目作者が始めて恋愛について、実験的に書いてみた作品です。当然、クオリティが高いわけではないです！それでもよければどうぞ。

（前書き）

【初恋とは、少しばかりの愚かさど、ありあまる好奇心のことだ】

——バーナード・ショーより

機動六課は数百の次元世界を管理する時空管理局の中にあつて、異常とも言える戦力を保有する、時空管理局有数の部隊だ。その有用性のかの「J・S事件」にて証明されており、その功績から「奇跡の部隊」とも称されるほどだ。そして、機動六課は世間一般的にも有名な部隊であり、正に「表舞台」という日の当たる所で活躍している部隊でもあつた。

対して、無限書庫は、そんな華やかな道筋を辿ってきた機動六課とは真の意味で正反対な、陰険で薄暗い道を歩んできた、管理局の上層部だけによく知られている部署である。薄暗い所もあれば、真つ黒としか言いようのない事もしてきた、正に「舞台裏」という日陰の場所にてその力を発揮してきた無限書庫は、恐らく最高評議会亡き今、最も時空管理局の闇に近い部署とも言えるだろう。

機動六課と無限書庫。漢字の数は同じなのに、どこからどこまでもが正反対な部隊と部署。

片や、表舞台でも有数の戦力を保有する、管理局切つてのEースが揃いし部隊、機動六課。

片や、舞台裏にて知らぬ者無き情報の要、管理局の闇をも内包し、利用すらする無限書庫。

戦力と情報の切り札にして、管理局を表から鼓舞する部隊、裏から支える部署でもあるその二つは、しかし、驚いた事に、その部隊と部署を束ねる二人の人物たちが幼馴染であつた。それも、十年来

という長さの、である。

嘘の様な、本当の事実。「現実には小説よりも奇なり」という言葉を体現したような、信じられない偶然の産物であるその縁は、しかし、今も切れる事無く、その二人を繋げていた。

それこそ一度も切れる事無く、ずっとずっと、小指の先と先とを、赤い糸で繋げていた……。

タヌッタヌッタヌッタヌッ……

時空管理局本局と無限書庫とを繋ぐ通路に、一人分の靴音が高らかに響いた。それは一定のリズムを保ちながら、途切れることなく、無限書庫の方へと近づいていく。通路を成す無機質な壁は、ただその音を反響させるだけで、その空域からヒトらしさや暖かみなどを冷却し、冷たくさせていく。その冷たさに背筋を寒くしながら、靴音を今も通路中に響かせている、ボブカットの髪型をした、おばい^{おば}が心許ない女性——タヌキにしか見えないと、専ら評判である八神はやて二等陸佐が、大量の紙を両脇に抱え、無機質な壁が延々と続く通路を、タヌタヌと歩いていった。

「……毎回思うんやけど、ここ、いくらなんでも無機質すぎん？
もうちょい花とかあれば、それだけでだいぶ違うんやけどな……」

タヌタヌ、タヌタヌ、との擬音が聞こえてきそうなタヌキっぷりで通路を歩いているはやては、毎度ここを通る度に呟いていることを口にしながら、それでも人っ子一人すらい無人の通路を、この先に友人がいる事を心の支えとし、寂しい、という感情をその支えで無理やり抑えつけて、タヌタヌと歩いていく。

「……へ、へん！ この先にはユーノ君があるんや！ せやから寂しくなんてあらへん！ そうや、寂しくなんか……なんか……」

黙々と、声すら冷たくなっていく空間をタヌタヌと歩いていくはやて。しかし、その途中で発せられた独り言は、後半になるほどに、ボソボソと細く、小声になっていった。彼女は今、明確に「寂しい」と感じていたのだ。なんてことは無い、ただの無機質な通路を歩いているだけで。はやては何時もならここを誰かと一緒に歩いていくのだが、家族までもが揃って用事が出来てしまっていて、結局、はやて一人でここに来なければならなかったのだ。それを猛烈に後悔し始めるはやて。

「こ、こんな事なら、無理やりにもリインを連れてくればよかったなって、もう後の祭りやな、ホンマに……」

しかし、時間を巻き戻す事はできない。故に、ただ屹然と、前を向いて進んでいくしかない、はやてはポンポコな腹をそう決めた。目尻に涙が見えたのは、気のせいにくれると嬉しいわ。

「よし、覚悟も決まった事やし、何時ものわたしらしく、元気一杯に行くで！ ちょう待っててな、ユーノ君！ 婚約者のはやてちゃ

んが、今、そっちに行きまっせー！」

はやてはそう元気一杯に叫び、また一歩ずつ歩み始めた。通路に冷た過ぎる靴音が反響する。しかし、今度は寂しさを感じる事はなかった。何故なら、はやての胸中には、一人の男が浮かび上がっており、その男の存在が、はやての心を奥底から暖めていたからだ。

そして、彼女は間もなく管理局の闇すら抱える無限書庫、その入り口へと辿り着いた。そこで何が起きるのかも知らないで。

はやてが無限書庫に訪れる、その二日前。ユーノ・スクライア無限書庫司書長は、何時にない真剣な表情で、無限書庫に備え付けられているモニターと格闘していた。その顔は近年でも稀に見るほど凛々しい表情を浮かべており、その顔を直視してしまった無限書庫司書長専属秘書の一人が、顔を真っ赤にして卒倒したほどだった。ちなみに、無限書庫司書長専属秘書は、計六人から成り立っている。そのぐらいの人数がいなければ、優秀な彼女たちですら、ユーノの補助すらできなかったからだ。

「……あゝッ！ あの黒い害虫め……本当に殺してやりたいなアアアア！」

そんな女性を一発で落とした優男風の眼鏡を掛けた男性、ユーノは、柔らかなハニーブロンドの長髪をガシガシと片手で乱雑に掻きながら、モニターのコンソールを高速で、憎悪を込めながら叩きまくっていた。モニターには黒い害虫と評された提督——クロノ・ハラウン提督からの資料検索依頼が映っており、その提督からの依頼だけで、十個はあるモニター全てが埋まっていた。それがどれだけの量なのか、言うまでもないだろう。強いて言うなら、この時点でユーノはもう五日ほど眠った記憶が無かった。それだけで、クロノの依頼がどれだけ大量だったのかが分かるだろう。

「しかし、司書長。今司書長のモニターに映っている資料さえ、あの黒い悪魔に提出してしまえば、この依頼も終了し、地獄に等しき「黒き五日間」も終焉を迎えることでしょう。ですから……あと一息です、頑張ってください」

「……はい、秘書長の言う通りです！ 頑張ってください、司書長！」
「」

「……分かっているから、そんなに引つ付かないでよ、皆……」

しかし、そんな無限書庫の歴史に残る様な惨事、「黒き五日間」を招いたこの依頼も、すでに終盤も終盤、あと数十分もあれば終わる所まで来ていた。それに知らず知らず、笑みを見せる司書長と秘書一同、そして無限書庫の司書達。

「よし、あとはこのボタンさえ押せば……！！」

「……行つて下さい、司書長！」

「……この悪しき依頼に、止めを刺して下さい、司書長！」

希望が司書長と秘書一同、さらには無限書庫中にいる司書達に広がっていく。その顔はすでに喜びで破顔し、中には昼間の業務中に

も関わらず、酒盛りを始めようとしている司書もいるほどだった。あちらこちらから「ばんざーい、バンザーイ！」という歓喜の聲が上がり、それらが合わせて大合唱となり、広大な無限書庫を大きく振るわせた。ユーノはその光景を、司書達と同じ喜びを共有しながら少しの間眺めると、コンソールの上に白くて美しい指をポンッと置いた。あとはこのキーを打つだけだッ！

「ふっふっふっふっ……クロノ、これで君の依頼は……」

『ブーン、ブーン。非常事態発生、非常事態発生。コードネーム「G」の通信回線が、無限書庫の通信回線に接近してきています。繰り返します。非常事態発生、非常事態発生。コードネーム「G」の通信回線が、無限書庫の通信回線に接近してきています……』

「……な、なにイイイイツ!?」「……」

ユーノの指がキーを打つ……のと同時に鳴らされた警報が、無限書庫中を振るわせていた希望を一転、黒々とした絶望へと変えさせた。それに思わずムンクのような顔をしてしまうユーノ含む一同。

「ほ、本当に……本当にあいつが、あの「G」がここに来るのか!?」

「い、いや……嫌よもう……今日こそは自分の部屋で寝られると思っただのに!」

「オレ、この依頼が終わったら、今度こそ彼女に告白するんだ……」
「悪魔様夜叉様夜天様……どうかどうか、「G」に天罰を……天罰を……!」

あちらこちらから、司書達の断末魔とでもいうべき声が聞こえてくる。その精神崩壊寸前にまで追い詰められていく司書達を見て、焦ったユーノはこの混乱を抑えるべく、司書達にまだ残されている希望を示そうとした。

「皆、落ち着くんだ！ まだ仕事の依頼だと決まったわけじゃないだろう！？ もしかしたら、あの血も涙もどこかに捨て去ってきた黒いのにだって、スズメの涙ほどの慈悲ぐらいはあるかもしれない！ それに今は賭けるんだ！」

「……お、おー……」

しかし、そんな希望を示しても、司書達のモチベーションは一向に上がらず、首を吊る為の縄まで持つてくる始末。それに最近思考が重くなってきた頭をさらに痛ませながら、クロノからの通信に答えようと、モニターを展開させるユーノ。周りはすでに葬式もかくやという雰囲気だ。

『相変わらず貧相な顔だな、フェレットもどき？』

「依頼はお断りします。ですので、もうお帰り下さい、提督」

『おい、僕が来ているのにその態度は……』

「お帰り下さい、提督」

『……今回は、依頼じゃない。プライベートな件だ。だからモニターを消そうとするな、ユーノッ！』

「……なん……だと……？」

クロノの口から「依頼じゃない」という単語が出てきた瞬間、無限書庫の空気が氷点下並みに凍りついた。今までに聞いたことすら無いその単語に、無限書庫の司書達、引いてはユーノまでがこれが現実なのか夢現ゆめうつなのかを疑う。一斉に頬を引っぱり、現実だという事を確かめ合う司書達。そして、これが現実だと知ると、

「……ヒヤッハーツ！ 世界はまだオレ（私）達を見捨てていなかったんだあああああッ……」

怒号を発するように、そう叫び出した。まるで世界に対してこの幸せを見せつけようと、この世界がまだ捨てたモノじゃないということを確認するかのように、司書達は声を張り上げ、その喜びを体現しようとする。その様子をモニター越しに見ていたクロノは、冷や汗をタラリと流して、頬を若干引き攣らせた。そんなに僕の依頼が嫌だったのか、こいつらは……。

『……ゴホン。でだ、ユーノ？　そろそろ本題に入りたいんだが……』

「ちょっと待っててくれない？　今この「夜天の葡萄酒^{ワイン}」を一気するから」

『お前は昼間っから何ワインなんかを飲もうとしているんだッ！？』
「いや、だって皆とこの喜びを分かち合いた……冗談、冗談だから、そんな恐い顔をしないでくれ、クロノ」

『冗談じゃなかったら、僕がお前を冷たい牢屋にぶち込む所だった……まあ、冗談ならいい、冗談ならな。とりあえず本題に入りたいんだが……』

ユーノが言う怖い顔から、いつもの無愛想な顔に戻ると、クロノはユーノの後ろで祭りの様な事をし始めた司書達を見て、言葉を濁した。それが意味する事に気付いたユーノは、すぐさま無限書庫から司書長室へと移動した。ユーノについていこうとする秘書達も部屋から追い出し、完全な二人つきりとなるユーノとクロノ。

「……さて、一応秘書達も追い出したけど、これでいいのかい、クロノ？」

『ああ、助かる』

「で、話は？」

『いや、実はな……』

しかし、クロノは二人つきりになった後も、中々言葉を紡がなかった。時折唸りながら、一人で悶絶する。それに（速く言えよクロノ！ 仕事がつつかえてんだからさー！）と苛立ちつつ、それでも辛抱強く待つユーノ。

『……ええい、ままよ！ ユーノ、お前はあまりにも働き過ぎだ！ だから今日から三日間、休暇だ休暇！ 以上！』

「……What?」

ユーノの顔が、豆鉄砲を食らった鳩みたいな顔になった。

「……は？ どういう……」

『ちなみに、これは母さんの決定だ。逆らえると思うなよ？ それと、僕はちゃんと伝えたからな！？ それじゃあ精々頑張って休んでおけ、フェレットもどき！』

「……って待てよクロノ！？ ちゃんと説明して……って、もう切りやがったよあの黒いの……！」

そしてその隙に、クロノは通信を切って、その場からの退避を完了させた。それに毒づきながら、先程の言葉を嫌悪感と共に、脳内で再生してみる。

「（三日間休暇、三日間休暇……え？）三日も休めるの？ だった……だったら……！ ハッ！？ こうしちゃいられない！ 急いで支度しないと！ 時間もチャンスも有限なんだ！ だから、この休暇を利用して今度こそ……！」

ガッツポーズしながら独白を続けるユーノ。その姿を偶然にも見てしまった秘書達は、皆一様にヒソヒソ話をしていてそうな。

「あの、すいません。今日そちらの司書長にアポを入れていた八神ですけれども……」

「少々お待ちを……ブックさん？ 今日司書長にアポを入れていた方に、「八神」という女性は……分かりました、速やかに御通し致します。八神はやて二等陸佐、此方にどうぞ」

無限書庫に到着したはやては、まず入口の側にある受付口に向かった。無限書庫は管理局の情報全てを抱えると言ってもいいデータベースだ。当然、セキュリティの面に関しても、かつての最高評議会並みに硬い物となっている。もし受付口以外から入ろうとすれば、たちまちの内に本局中の魔導師達が、その侵入者と見做された人間を捕らえに来るだろう。

「……いつも思っんやけど、手続きがえらい面倒やね、ここは」

「致し方ありません。ここは無限書庫、世界の記憶を納めしデータベースですから」

「……まあ、そうなんやけどな。でも実際、何かと面倒起きてへん？」

「そういった変事は、全て司書長とかつての最高評議会が片づけてくれました。なので、何の心配も要らなかつたんです」

「……最高評議会？　なんでまたそんなお偉方が……？」

「さあ？ それは私の様な端末には分かりかねます」

顔見知りの受付嬢とそんな会話をしながら、目の前の重厚な扉が開き切るのを待つはやて。彼女を三人積み重ねたとしてもまだ足りない大きさの扉は、縦に開くまでかなりの時間を有するのだ。無論、これも一応は対テロ対策の一環なのだが、如何せん開けるのに時間がかかり過ぎ、効率が悪いように思える。

「とりあえず、司書長は司書長室にいらっしゃる様です」

「そつか。ほな行つて来るわ。また話そうな？」

「ええ、話し合いましょう。……祝事について（ボソッ）」
「？」

その効率が悪いようにしか思えない扉が、一分近くかかって、漸く通れるようになったのを機に、はやては受付嬢と別れ、無限書庫内部へと入っていった。受付嬢の最期の言葉は、はやてには届いていなかった。しかし、いつもクールで無表情な彼女が、とてもなぐい笑顔を浮かべていたのが、少しばかりの嫌な予感を、はやてに齎した。

「（何かあるんやろか……？ ま、いつか）えーっと、司書長室は、
つと……」

その嫌な予感を振り払いつつ、縦横無尽に張り巡らされている蜘蛛の巣みたいな白い通路を、タヌタヌとタヌキらしく歩いていくはやて。向かう先はこの無限書庫の中でも、特に立ち入りが難しい事で知られる「司書長室」だ。

「こっち……いや、こっちやったかな？ ……アカン、また迷つてしもつた。これで何度めや、八神はやて！ ……五、いえ六です隊

長！……アホな事やってないで、はよ近くの司書に聞こ」

その司書長室まで道のりを、タヌキは順調に迷っていた。それはもう見事なまでに。

「……てか、毎度思っんやけど、ここらへんはホンマに訳分からんな〜……もう何回曲がったのかも分からへんわ……ヘルプッ、本当にヘルプ・プリーイズッ!？」

何回曲がっても浮いても廻っても、全てが同じ風景にしか見えな
い。そんな「司書長室？何それ食えるんかい？」状態に陥ったは
やては、嫌な汗を全身から滴らせながら、一向に相見えない司書達
を、懸命になって捜し続ける。しかし、どれだけ歩いてても、たった
一人の司書ともかち合わず、その物音さえも聞こえない。それに疑
問を感じ始めたはやては、さらに嫌な汗を体中から噴き出した。

「……おかしいやろ、これ？……うう、ホンマにリインを連れて
くれば……」

タレ気味の目尻に涙が溜まる。不気味な雰囲気醸し出す書庫に、
眉尻が情けなく下がる。恐怖から腰が引け、一步を踏み出すのさえ
億劫になる。

「……もしも〜し？ユーノ君の婚約者の、八神はやてちゃんです
よ〜……誰か返事してな〜……」

自分のオドオドした声が、無限書庫内に弱々しく響いた。しかし、
予想していた通り、返事は一つも返ってこない。

「……………」

タヌッタヌッタヌッタヌッ……

自分の歩く音だけが、今のはやてに聞き取れる唯一の音だった。周囲には人の動く音、ましてや気配すらしない。その明らかにおかしい現実には、狂わんばかりの恐怖を感じるはやて。

「……う……う……う……堪忍して欲しいわぁ……」

見果てぬほどの高き所にまで敷き詰められた重厚そうな本が、はやてを押し潰そうとしているかのように思えた。縦横無尽に走る白い通路が、旅人を迷わせる、脱出不可能な迷宮みたいに見える。人がいないというだけで、無限書庫はここまで空寒いモノになるのか……と、変な所で感心し、同時に、こんな状態の無限書庫にずっといた友人——ユーノの事が心配になるはやて。彼は九歳の時から無限書庫にいたわけだが、その時、彼の側には、誰がいたのだろうか？

「（……うっん、誰もおらへんかった。うちも、フェイトちゃんも……なのはちゃんも……）」

今更ながら、ユーノがとても寂しい道を歩んできた事に気付くはやて。自分の側には家族であるヴォルケンリッター、それに親友であるのはやフェイトが側にいて、自分の夢にも協力してくれたが、ユーノはどうだっただろうか？ 誰かに助力を頼んだだろうか？

……否、彼は誰の力も借りずに、自分一人の力だけで、無限書庫を「もう一つの情報部」と言われるまでに押し上げた。

それは純粹に凄い事なのだろう。だが、はやてには、その偉業がとても寂しく、虚しいモノに思えた。

何故ユーノは誰の力も借りなかった？ それは、力を借りれるほど信頼のある人間がいなかったからだ。クロノとは幾らか共闘したみたいだが、ユーノは無限書庫という「自分の御城」を築く際には、そのクロノからさえも力を借りずに、独力のみで建築していった。その結果が今の無限書庫なのだろうが、それはあまりにも……そう、あまりにも寂し過ぎるのではないか？

「……」

無限にループを描く思考が、はやてを捉えて離さない。無言で歩を進めるはやて。だからだろうか、目の前にいるモノに気が付かなかったのは。

『Trick or Treat!』

「……ほえ？」

気が付けば、はやての目の前に、変なモノが立っていた。その変なモノは、目と鼻、口を模すように刳^くり抜かれた南瓜^{かぼちゃ}を頭に被り、夜天のような色合いのマントで上物のスーツを覆い隠す格好をしていた。その姿を見たはやては、不意に、自分の故郷である「第97管理外世界」におけるJack-o'-Lantern^{ジャック・オー・ランタン}という南瓜のお化けを連想した。

『Trick or Treat!』

その変なモノが再び言葉を発した。『お菓子をくれないと悪戯しちゃうよ!』と。それに対して、はやては笑いながら、懐から一個の飴玉を取り出し、Jack-o'-Lanternの白くて美しい指に手渡した。その白くて美しい指に見覚えがあるような気がし

たが、はやては特には気にしなかった。幽霊とはいえ、自分以外の何モノかが目の前に現れてくれたのだ。それに安堵を感じて、気持ちを若干緩ませていたはやてには、それに気付く余裕すらなかったのだ。

『…………』

「…………？」

対して、飴玉を手渡されたJack-o'-Lanternは、見事なまでに硬直していた。まるで予想外な事でも起きたみたいだ。……いや、どうやらその南瓜のお化けは、はやてからお菓子を貰えるとは思っていなかったらしい。飴玉を凝視したまま、微動だにしないJack-o'-Lantern。

「…………！」

その動かなくなったJack-o'-Lanternをじつと見ていたはやてに、ちよつとした悪戯心がムクムクとその鎌首をもたげてきた。先程まであんなに怖い思いをしていたのに……何故かこの南瓜のお化けを見ると、不思議と心に余裕が生まれるのだ。そう……この南瓜のお化けは、どこか優しい気配を纏っていて……ついつい、そのあるかどうか分からない素顔を、見てみたくなる。

「とりやッ！　つて、ええッ！？」

「…………へ？」

Jack-o'-Lanternの南瓜頭を上を持ち上げるはやて。瞬間、はやての耳に若い男の、間抜けな声が届く。しかし、そんな些細な事、今のはやてには何の関係もなかった。何故なら、Jack-o'-Lanternの南瓜頭から出てきた顔は、彼女も

よく知る人物だったからだ。

「な、なんでユーノ君、こないな格好しとるんツ!？」

「あゝ……」

そう、その南瓜頭から出てきた顔は、彼女と十年來の付き合いがある、この無限書庫の司書長、ユーノ・スクライアであった。

3LDKも目じゃない広さの部屋の、半分以上が古臭い本で埋まっている司書長室。その硬質な床の上に、ユーノは正座させられていた。正面には、夜天様のような表情をしたはやてが仁王立ちしている。その怒りのプレッシャーを死の予感と共に感じながら、ユーノは事の経緯を喋り始めた。

「ほんで? 何がどうなってるん? きりきり吐いた方がええで、ユーノ君?」

「いや、えつとね……ほら、今日って第97管理外世界で言う「ハロウィン」の日でしょ?」

「そんで?」

「それで、その日に習ってはやてを驚かそうとしたんだ、け……ど……」

「ふーん……それなら、どうしてうちがこんなに怒つとんか、ユーノ君は分かるん？」

「それは……えーと……無限書庫総出ではやてを驚かそうとしたか

……」

「ユーノ君のアホォー！ そんなんじゃないねん！ やっぱりユーノ君は乙女心タヌキつつうのを一ミリたりとも分かつとらんわ！」

「うつ……そこまで言わなくても……」

「そんぐらいのもんなんや！ アーユースタンドッ!?」

「い、イエス、サー！」

はやての怒気と言う名のプレッシャーが二割増しになった。それにユーノが流す冷汗の量が二倍となる。既にユーノが着ていた白の上品なシャツは、その冷や汗でビショビショになってしまっていた。それでも八神はやての怒りは収まる所を知らず、怒号を次々とユーノに発していく。

「ええか!? うちが怒つとるのはな……ユーノ君自身に対してや！ どうしてユーノ君は、うちに頼らんで、独りで何でもかんでも解決しようとするん!?!」

「つてええ!? なんか話飛んでない!?!」

「飛んどない、気のせいや！ うちらは……少なくともうちは、ユーノ君が頼ってきてくれるんなら、喜んでこの力を貸すし、それでユーノ君を助けたいと思うとるんよ？ なのに、ユーノ君はいつつもいつつも自分の事だけは後回しにして、自分だつて危ないのに、絶対にうちらにも皆にも助けを求めようともせえへん……そんなにうちらは頼りないんか、ユーノ君の中ではッ!?!」

「……はやて、一体どうしたの？ いきなりそんな事を言うなんて、正直、何時もの君らしくないよ？」

「……気が付いたんや、誰も居ない無限書庫を、独りで歩いてみてな。正直、この無限書庫があそこまで空寒い物だったなんて、うち

は知らへんかった。そして、あそこで九歳の時から司書として活動していたユーノ君が、どれだけ寂しかったのかも……うちは、知らなかった……」

夜天様のような表情から一転、沈痛そうな表情をするはやて。そのコロコロと変わる表情に、ユーノは真面目な話の最中にも関わらず、つい可愛いと思ってしまった。これは八年前のあの事故からはやてに抱いている「想い」の弱味なのだろうか？ と、真剣に考え始めるユーノ。勿論、はやての話は彼の耳には聞こえていなかった。

「って、ユーノ君、ちゃんとはやてちゃんの話、聞いとるん!？」

「……えッ!？ あ、うん、勿論だよはや」

「嘘やッ!！」

はやてはユーノの言い訳を、速攻で嘘だと断定した。その力強さは、まるで浮気をした夫に問い詰める妻のようである。それにタジタジとなったユーノは、視線を泳がせつつ、はやてにただひたすら謝った。

「……ま、こんぐらい謝ってくれるんなら、許してやってもええわ。ただし!」

「……ただし?」

「これからは、うちの話をちゃんと聞く事! 分かったなら返事!」

「い、イエス、サー!」

通算31回目となる土下座にて、漸くはやてから許しを得たユーノ。しかし、まだはやての話は終わっていない。

「で、ユーノ君的には、こちらは役立たず過ぎて協力も要請できへん……つつ事で、OKなん? なら、これをなのはちゃんとフェイ

トちゃんにも……」

「いや全ツ然違うからねそれ！？　というか、僕まだ何も答えてないよねッ！？」

「こまけえ事は気にすんな……って、ゲンヤさんは言ってたで？」

「だから、全ツ然細かいからねそれ！？　寧ろ僕が終わっちゃうから、それを広められるとッ！？」

「ほな行こか？　ユーノ君も婚約者であるはやてちゃんの話の聞かんかったから、これでお相子や」

「……」

「……あれ？」

はやては急に黙りこんだユーノに、首を傾げた。見ると、ユーノは顔を真っ赤にしながら、何事かを呟いている。

「……そ……かく……チャン……」

「……ユーノ君？」

「……よし！　はやて、君に渡したいモノがある！」

「い、いきなり真面目になって、どうしたん？　それに、なんだか急に話が逸れた様な……」

「それははやての気のせいだよ、きつと！　取り敢えず、左手を出して欲しいんだけど……」

「……？　まあええけど……」

ユーノは顔をトマトみたい真っ赤にしたまま、はやての左手を取り、その薬指を優しく抑えた。その拳動にえッ！？　となるはやて。はやての顔が次第に赤くなっていく。何故なら、はやてにはユーノの拳動が、まるで……

「ゆ、ユーノ君……ホンマに、うちな」

「うん、完璧だ！　やっぱりはやてにはタヌキだね！」

「……は？」

だが、この結婚指輪を渡すしかないシチュエーションを、乙女の純情込みの淡い期待を、フラグ折りで定評のあるユーノは完璧に裏切った。恐る恐る、左の薬指を見てみるはやて。すると、そこには二頭身にデフォルトされたタヌキの指輪がキラリッ！と、その存在をはやてにアピールしていた。それを見詰めること、暫し数秒。

「いやゝ迷った甲斐があつたよ！ まさかこんなに似合うだん」

ブチ狸ッ！

そのタレ気味な目をしたタヌキを見ていたはやてから、何やら切れてはいけない物が切れてしまったような音が聞こえた。それを聞いたユーノの顔色は、既に青を超え、白になっていた。歯が煩くガチガチと鳴ったが、今はそれに意識を割くことさえできない。

「……え？ 何今の音怖い」

「へえゝ……ユーノ君はどうやら、乙女の純情を裏切ったモノがどうなるか、知らへんかったみたいやな」

表面上は穏やかに、でも裏面は怒りで燃え滾っています！ を体現するかのように、はやては柔和な笑顔を浮かべながら、全身からSS+クラスの魔力を放出した。はやての保有魔力と比べれば、ほんの少しの魔力を簡単に放出しただけだったが、ユーノにしてみれば、それは間近で台風の暴風を受けている様な物だった。必死になつて吹き飛ばされまいと、近くの本棚と通路に翠のチェーンバインドを巻き付けるユーノ。しかし、最後の夜天の主の怒りは、彼が思っているよりも遥かに深く、恐ろしいものだった。

「今のシチュエーション……実はうち、結構憧れていたんよ？ それも相手はユーノ君やからバッチ来いッ！ だったんやけど……」

「え？ それって……」

「見事に……ホンマ見事にぶち壊してくれはったな、ユーノ君。純情だけに留まらず、乙女の夢までブレイクするなんて……さすがのはやてちゃんも、これには脱帽するわ」

「待つてはやて！ さっきん」

「せやから……いっぺんぐらい、乙女の怒りっちゅうのも、体験した方がええで？ それをすればどうなるか……それを知る為にも、な」

「え待つて何で目のハイライト消えてるの結構本気で魔力集めてないその魔力量はさすがに防ぎきれないだからちよっと待つて欲しいというか想い留まってはやてー！」

「やかましいわ、乙女の敵が！」

白い魔力光を放ちながら、はやての右手に、ユーノの全魔力を何乗しても届かない程の、莫大な量の魔力が集まっていく。それはいくら防御に優れているとはいえ、たかだか総合Aランクに過ぎないユーノには、どう足掻いても防げない一撃だ。全身に恐れが奔り、膝が折れそうなる。だが、ユーノはまだ全てを彼女に伝えていない。伝え切れていない！

なら、後は勇氣と……行動あるのみ！

「はやて、聞いてくれ！ さっきは御免、さすがにやり過ぎたと、僕も思う！」

「聞く耳なんてあらへん！ 乙女の敵になったユーノ君は、夜天の中だけで輝けばいいんや！」

「だけど、アレは僕が用意したちよっとした悪戯だったんだ！ そして、こっちが本当に君に渡そうとした物だ！」

「……ほえ？」

ユーノはチェインバインドで自身の体を本棚と通路に固定しながら、振るえる指で懷から掌の中に入るぐらいの小さな箱を取り出した。そして、その箱を開けると同時に、ユーノを襲っていた魔力の暴風が吹き止んだ。

「これが……僕の気持ちだよ、はやて」
「……」

はやてはユーノにそう話しかけられても、微動だにしない。いや、微動すらできなかった。その眼は箱の中に納められていた、白い宝石に釘付けであった。その白い宝石は司書長室を照らす白光を受け、白く、清く、美しく光っていた。それを見たはやては、言葉が出ない程驚喜し、知らず知らずの内に、目から涙を一つ、零れ落とす。

「……さっきの悪戯は、本当にごめん。まさかはやてがそんなに憧れていたなんて、知らなかったから……」

「……うん」

「だけど、これだけは……これだけは本当に、嘘じゃないんだ。これが僕の気持ちなんだよ、はやて？」

「……まに」

「……え？」

喜びで喉が詰まり、上手く声が出せない。それにもどかしさを感じるも、はやては懸命になって彼女自身を悩ませていた疑問を、ユーノにぶつけようとする。これで決着を着けたいと、そう願って。

「……ホンマに、うちなんかでいいの？ ユーノ君は、なのはちゃん
の事が……」

「ストップ、それについてだけど……正直、僕にとって、なのは大切な人だ。けれど、それは間違っても「愛」なんかじゃない。……強いて言えば、僕のはに対する愛は、兄弟の絆……みたいな物だったんだよ」

「……？」

「不思議そうなたヌキ顔をしているね？ でもね、それが僕となのはの関係なんだ。僕達は、あまりにも近く、そして、あまりにも遠かったんだ。歩み寄れそうで歩み寄れない、そんな距離感を、僕達二人は、この胸に抱えていたんだ」

ユーノは遠い眼で、かつて有りし日を思い出しながら、はやてに彼となのはの関係を論していく。その眼は遠く遠く、何を見ているのかさえ定かではない。

「どんな兄弟にだって、仲よしの限度みたいなモノはある。そして僕となのはは、その限界値ぐらいの仲だったんだ。けれど、いくら仲が良くなったって、二人の絆はあくまでも兄弟。それ以上進む事は、ほぼ不可能で……故に、僕となのはの歩み寄りには、そこで限界を迎え、それ以上の進展が無くなってしまったんだよ、十年近い間、ずっとね」

「兄弟……成程なく、言い得てるわ」

「だけどね？ これに気付かせてくれたのは、他ならぬはやて、君なんだよ？」

「……はっ！？」

「君が八年前に、なのは墜落を受けて打ちひしがれていた僕を抱きしめてくれたから、僕はなのはとの距離を知ることができた。そして、それで僕は、自分が本当に愛していた女性に気付く事が出来た」

「……それが」

「うん。僕は八年前のあの日から、はやての事がずっと好きだったんだ。そして、これが今までの八年間で出した、僕なりの答え……」

「はやて、僕と結婚してくれないか？」

「……ひっく」

涙が止まらない。

「ひっく……ひっく……！」

涙の流れが途切れない。

「うう……うう……！」

世界がぼんやりとしか見えない。自分の手すら確認し辛い。けれど、それでも……彼の顔だけは、何故かはつきりと、視認することができた。

「ゆー、のくん……うん……うん……！」

そして、喜びで震える体を抱きしめながら、はやてはその首をゆつくりと、縦に振った……

【男と女が結婚したときには、彼らの小説は終わりを告げ、彼らの歴史が始まるだろう】

——ロミュビリユズより

（後書き）

長編をほっぱり出して書いた作品です。ユノはや最高！ 至高のC
Pこそユノはや！ なのははフェイトっていう嫁がいるから、部隊
長はユノとくつつくべき！ なモノを広められたらな〜と思いつ
つ書きました。しかし、始めて恋愛？ 染みたモノを書きましたが
…… とても難しいです！ もっと甘々なモノを書きたかったのに……
…… 力及ばず、無念です。そして、できれば感想を書いて下されば幸
いです。特に、悪い点を重点的に。ここまで読んで下さった皆様
には感謝を。

最後に。

もう少し続きを書きたかった……でも時間に余裕がなかった……駄
目な作者ですいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6086o/>

Jack-o'-Lanternはタヌキに「Trick or Treat」とのまもうた

2010年10月31日06時07分発行